

吉備国際大学  
社会福祉学部研究紀要  
第13号, 145 - 153, 2008

## 保育専攻大学生における育児性の形成促進 ～ 保育実習とその後の学習経験による効果～

大井裕紀子<sup>1)</sup>、中山 哲哉<sup>2)</sup>、栗田 喜勝<sup>1)</sup>

**The Promotion of Attitudes toward Child-Rearing  
on The Students of the Child-care Person Training Course  
～ The Effect by Child-care practice experience  
and The Post- learning of Teaching Practice ～**

Yukiko OOI<sup>1)</sup>, Tetsuya NAKAYAMA<sup>2)</sup>, Yoshikatsu KURITA<sup>1)</sup>

### Abstract

This research stands in the position that attitudes toward child-rearing changes by the experience. The purpose of this research is to examine how attitudes toward child-rearing on the students of the child-care person training course change by child-care practice experience and the post- learning of teaching practice. As a result of having investigated it for 54 university students (male and female) of the child-care person training course, the following was clarified. 1. The experience of child-care training changes feelings for child-rearing in the positive direction. 2. They have taken root by the post- learning of teaching practice

Key words : attitudes toward child-rearing

students of the child-care person training course

child-care practice experience post- learning of teaching practice

キーワード : 育児性 保育専攻大学生 保育実習 実習事後学習

### 1 はじめに

(1) なぜ、「育児性」なのか。

近年、核家族化の進行や出生率の低下に伴って、  
青年たちは家庭や地域で子どもと接触する機会その

ものが減少し、子育てや親になることを学ぶ機会が  
不足してきている。そのため、今や、自分の子ども  
が全く初めての接触経験となることはごく普通であ  
ると言える。

<sup>1)</sup> 吉備国際大学社会福祉学部子ども福祉学科  
〒716 - 8508 岡山県高梁市伊賀町8

Department of Child Welfare, School of Welfare, KIBI International University  
8, Igamachi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)

<sup>2)</sup> 吉備国際大学社会福祉学部健康スポーツ福祉学科

牧野<sup>1)</sup>は、母親たちが都市化や核家族化、夫の不在により、育児の責任を一人で背負い、孤独感と育児の悩みや不安に陥りやすい状況にあることを指摘し、育児不安という概念を提示した。育児不安を訴える母親たちの中には育児ノイローゼに陥り、適切な育児行動が取れなくなることがある。そして、母親が子どもを育てる負担に苦しみ、意のままにならない子育てに苛立ったり、時として虐待に走る事件が続いている。このような背景から、母親たちの育児負担の軽減に向け、2003年には次世代育成支援対策推進法が成立した。しかし、制度の改正だけで育児の負担が軽減し、不安が解消されるわけではない。実際に、適切な育児行動ができる能力を育成することが必要である。松村<sup>2)</sup>は、「子どもを理解し適切な対処ができる能力は、大人になってからすぐに身につくものではなく、大人になる前に乳幼児について学び、母性・父性を育む教育が必要である」と述べている。

しかし、これまでその能力を母性という切り口で研究されたり、論じられたりしてきたが、近年、子ども虐待などの伝統的な母性観が実際に破綻をきたしていることを示す出来事が表面化している。そうしたことから、母性観の再検討が進みつつあり、あわせて父性の研究もなされるようになってきた<sup>3)4)</sup>。その結果、母性・父性の従来の概念を突破して、人間の持つ、他を慈しむ心・他者を愛する心、という能力・特性に関心が集まるようになってきた<sup>5)6)</sup>。

大日向<sup>7)</sup>は、その能力・特性を「育児性」という用語でとらえることを提起し、従来の性別役割分担や固定した親役割にとらわれることなく、ひとりひとりの育児能力を検証し、その多様性や個別性を見いだしつつ、その弱点を支援していくことが、これからの社会的変化に対応した育児のあり方を求めるために必要である、と主張している。同様の視点から、原<sup>8)</sup>は、これまでの母性が女性特有の属性、本能として位置づけられ、女性、男性の生き方や社会

的役割を固定化してきたのではないかと反省に立って、母性に代えて次の世代を産み育てる能力として「次世代育成力」ということばを提案している。

汐見<sup>9)</sup>も、自らの直接の養育体験から、「無私の愛情が、母性と言われているものではないか、しかし、母性愛は男女に関係なく、懸命に育児をしてきたものが、後天的に獲得する愛情であり、また愛情体験である。子どもに無私の愛情を注ぐような親子関係は、男性、女性を問わず、手に入れられるものであり、それは育児への真剣な参加とそこで得た喜びに基づくものである」と言っている。

そこで、本研究では、中山<sup>10)11)12)13)</sup>の研究に準じ、大日向<sup>14)</sup>が提唱している「育児性」を使用する。そして、その概念を“子どもを育てる際の子育てに関する感情、認知であって、経験によって変容するスキルである<sup>15)</sup>”と定義する。この「育児性」は、従来母性ということばによって育児を母親に限定していたことばの響きから解き放ち、性差へのとらわれから解放されて育児の喜びを共有し、子どもの成長を皆で支えようという子育ての理念を打ち出した言葉である。現在の育児をめぐる育児不安や子ども虐待などの諸問題に対処するためには、母性本能論懐疑の視点から、男女における育児能力の形成・発達していく条件を把握することが重要であると思われる。

## (2) 「育児性」「親準備性」「母性準備性」などに関する研究

松岡・和田・花沢<sup>16)17)</sup>は、親準備性の発達要因について大学生男女を対象に、また、牧野・中西<sup>18)19)</sup>は、親になることの準備状態について高校生男女を対象に、検討している。そして、青木・松井<sup>20)</sup>は、母性準備性と乳幼児との接触経験との関連を女子大学生を対象に検討している。さらに、鈴木・清水・伊藤<sup>21)</sup>は、育児性の発達について高校生から大学生までの女子を対象に、検討している。

一方、「育児性」「親準備性」「母性準備性」の尺

度も作成されている。親の準備状態測定尺度<sup>22)</sup>では、「子ども好き因子」、「将来の子育てに対する不安因子」、「子育てに対する評価・認識因子」、「乳幼児に対する嫌悪因子」の4因子を、母性準備尺度<sup>23)</sup>では、「乳幼児への好意感情」と「育児への積極性」の2因子を、抽出している。また、中山<sup>24)</sup>、鈴木ら<sup>25)</sup>は、育児性尺度を作成し、中山<sup>26)</sup>は「育児への接近感情」と「育児からくる疎外感」の2因子を、鈴木ら<sup>27)</sup>は「子どもへの接近感情」と「育児不安」の2因子をそれぞれ抽出している。これらの尺度を整理すると、「育児や子どもへの肯定的・接近的な感情」と「育児への否定的・忌避的な感情」という2つの次元から構成されることができよう。

### (3) 育児性を学習する場としての保育実習

先に定義したように、育児性が経験によって変容するスキルであるとするれば、子どもと関わる経験が育児性を促進させると考えられる。杉山<sup>28)</sup>は、看護学生における次世代育成力の発達に関連する要因を明らかにすることを目的とした調査研究を行い、その結果、小さい子どもの世話をしたり、一緒に遊んだりした経験のある者は、妊娠・育児に対して肯定的に考える傾向を持ち、次の世代を育てることを肯定的に考える傾向にある、ということを示している。また、花沢ら<sup>29)</sup>は、母性感情の発達と乳児接触経験との関係について、男女大学生、助産学生を対象に研究を行っている。その結果、幼少時から乳児との接触経験を多く持った人は、男女を問わず、乳児への接近感情・欲求が発達すること、つまり、母性感情の発達は、性的要因よりも個人生育史における乳児との接触経験の多寡により、大きな影響を与えることを明らかにしている。

中山<sup>30)</sup>は、青年期において子どもと関わる体験の場として、いかなれば人間関係能力・スキルとしての育児性を学習する場として、社会福祉実習を取り上げた。その結果、女子大学生における社会福祉実

習体験（子どもとの接触経験）が、育児への接近感情を増大させ、他方、育児からくる疎外感情を低減させること、つまり、女子大学生の育児への態度（好嫌感情）を肯定的な方向へ変容させることを明らかにした。また、社会福祉を専攻している女子大学生は、育児性の促進へのレディネスが高いと推測されるとも述べている<sup>31)</sup>。

では、乳幼児とのよりダイレクトな接触経験である保育実習体験は、育児性にどのような影響を及ぼすのであろうか。子どもの理解のためには、子どもとの直接的な接触が必要であり、おおむね4週間という期間、どっぷり乳幼児に密着し、子どもとともに生活すること、子どもの育ちを支えること、子どもを守りケアしていくこと、などを強烈に体験する保育実習は、育児性を促進させることが予測される。

さらに、保育実習体験を軸にして、青年の育児性はどのように変容していくのであろうか。事後学習後では、どのように定着していくのだろうか。

また、中山<sup>32)</sup>が作成した育児性尺度は、女子のみを対象として尺度化されたものだが、育児性は前述のとおり、男女の区別のない普遍的な両性共通問題である。この点から、男子にも適用可能であるかどうかの検証が必要である。

以上により、本研究では、第一に、育児性尺度は男子においても妥当性があるか（予備調査）第二に、保育実習は保育専攻大学生の育児性にどのような影響を及ぼすか、を明らかにすることを目的とする。

### (4) 目的

本研究においては、中山<sup>33)</sup>の育児性尺度により、保育専攻大学生の育児性の発達・変容について次の点を明らかにする。すなわち、育児性尺度が、男子にも妥当性があるのか、育児性は保育実習経験によって、どのように促進されるか、保育実習の事後学習によって、どのように変容するか、さらに1年後には、どのような変容が見られるのか、に

ついて検討する。

## 2 方法

### (1) 調査内容

育児性尺度20項目(6段階評定)

なお、尺度項目7は、男子に適用することから「自分の子どもを早く(もう一度)産んでみたい」「自分の子どもを早く(もう一度)産んで(得て)みたい」と修正した。

### (2) 調査対象と手続き

調査対象は、岡山県内の福祉系大学保育専攻大学生3年生27名(男11名、女16名)、同保育専攻大学生4年生30名(男9名、女21名)。

調査は授業時間等を利用し、集団法で実施した。

### (3) 調査時期

3年生は保育実習(2007年8月上旬から9月上旬までの20日間以上)の直前2007年8月上旬、直後2007年9月中旬、事後学習後(2ヶ月後)2007年11月中旬に、4年生は2007年11月中旬に実施した。

### (4) 分析方法

育児性尺度の項目への回答は、「全くそう思わない」1、「あまりそう思わない」2、「どちらかといえばそう思わない」3、「どちらかといえばそう思う」4、「ややそう思う」5、「とてもそう思う」6、と点を与えて得点の重みづけを行い(項目11は逆転)、育児への接近感情因子(10項目)、育児からくる疎外感因子(10項目)別に尺度得点を算出した。両因子とも、得点の高い方がその傾向を強く持っていることを意味する。

分析対象は、3年生27名、4年生27名である(欠損データは除外した)。

## 3 結果

### (1) 育児性尺度の妥当性(予備調査)

男子大学生と女子大学生で、育児性に差がみられるかどうかを検討するために、保育実習の直前のデータを因子及び項目ごとにt検定を行った(表1)。

その結果、すべての因子及び項目において有意差はみられなかった。このことから、育児性尺度は女子を対象として尺度化されたものであるが、男子にも適用が可能であると考えられる。

### (2) 保育実習と育児性との関連

保育実習を経験することで育児性がどのように変化するか、を明らかにするため、保育実習の直前と直後のデータをマッチングし、得点の差を因子及び項目ごとにt検定した(表2)。その結果、保育実習直後において、因子 : 育児への接近感情では得点が有意に高く( $p < .05$ )、因子 : 育児からくる疎外感では有意差がみられなかった。つまり、育児性の構成因子のうち、育児への接近感情因子においては高まっていることが認められた。

直前と直後との間に有意差及び有意傾向のみられた尺度項目を拾ってみると、育児への接近感情因子では、「子どもを育てることが好きである」( $p < .01$ )、「自分の子どもを早く(もう一度)産んで(得て)みたい」( $p < .10$ )、「子どもを育てることに充実感を感じる」( $p < .001$ )、「育児に専念したいと思う」( $p < .10$ )であり、すべて直後の方が高い。育児からくる疎外感因子では、「自分は育児をすることには自信がない」( $p < .05$ )、「育児をしていると、自分の行動が制限される」( $p < .01$ )、「育児をしていると自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるように感じる」( $p < .10$ )が、すべて直後において低い。保育実習を経験することは、育児への接近感情(子どもへの肯定的感情)を確実に増大させるとともに、漠然とした育児への自信のなさや束縛感・拘束感を低減させる効果があるといえよ

表1 保育実習直前の男女における項目及び因子の平均得点の差

因子 尺度項目	男子(n=11)		女子(n=16)		t値	
	M	SD	M	SD		
因子Ⅰ；育児への接近感情	4.64	0.55	4.59	0.80	—	n.s
1 子どもを育てることが好きである。	5.36	0.67	4.81	1.11	—	n.s
5 子どもを育てることに生きがいを感じる。	5.00	0.63	4.44	0.96	—	n.s
7 自分の子どもを早く(もう一度)産んで(得て)みたい。	4.55	1.21	4.88	1.15	—	n.s
10 子どものために、自分がしてやることを考えると気持ちがはずんでくる。	4.73	0.90	4.81	1.05	—	n.s
11 子どもを育てることは、自分には向かない(逆転)。	4.55	0.52	4.06	1.48	—	n.s
14 子どもの教育や将来のためなら、どんなことでもするつもりである。	4.00	1.26	4.13	0.89	—	n.s
16 子どもの便やヨダレなど、自分の子どもなら汚いと思わない。	4.64	0.92	4.75	1.34	—	n.s
17 子どもに関わっていると、時間の経つのを忘れる。	5.00	0.77	5.13	0.81	—	n.s
18 子どもを育てることに充実感を感じる。	4.45	0.69	4.81	0.98	—	n.s
20 育児に専念したいと思う。	4.09	1.22	4.06	1.34	—	n.s
因子Ⅱ；育児からくる疎外感	2.86	0.48	2.83	0.59	—	n.s
2 早く育児から解放されて、自由な生活がしたい。	2.82	1.17	2.69	1.08	—	n.s
3 子どもを育てることが負担に感じられる。	2.18	0.75	2.31	1.45	—	n.s
4 育児をしていると、自分が世の中に遅れてしまうという感じがする。	1.82	0.60	1.75	0.77	—	n.s
6 育児は孤独な仕事だと思う。	1.91	0.94	2.44	1.03	—	n.s
8 自分は育児をすることには自信がない。	3.18	0.98	3.69	1.25	—	n.s
9 育児をしていると、自分の行動が制限される。	4.27	0.79	3.94	0.77	—	n.s
12 育児をしていると、自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるように感じる。	3.36	1.43	3.25	1.29	—	n.s
13 育児をしていると、自分の若さや女性としての美しさが失われてしまうように感じる。	2.45	1.29	2.50	1.26	—	n.s
15 育児をしている母親は疲れてみずぼらしく見える。	2.27	0.90	1.94	0.93	—	n.s
19 育児ノイローゼになる母親の気持ちが解る。	4.27	0.90	3.81	0.66	—	n.s

表2 保育実習直前と直後における項目及び因子の平均得点の変化

因子 尺度項目	直前(n=27)		直後(n=27)		t値	
	M	SD	M	SD		
因子Ⅰ；育児への接近感情	4.61	0.69	4.87	0.59	-2.660	p<.05
1 子どもを育てることが好きである。	5.04	0.98	5.48	0.80	-3.075	p<.01
5 子どもを育てることに生きがいを感じる。	4.67	0.88	4.81	0.96	—	n.s
7 自分の子どもを早く(もう一度)産んで(得て)みたい。	4.74	1.16	5.11	1.05	-1.783	p<.10
10 子どものために、自分がしてやることを考えると気持ちがはずんでくる。	4.78	0.97	4.70	0.95	—	n.s
11 子どもを育てることは、自分には向かない(逆転)。	4.26	1.20	4.48	1.01	—	n.s
14 子どもの教育や将来のためなら、どんなことでもするつもりである。	4.07	1.04	4.33	1.27	—	n.s
16 子どもの便やヨダレなど、自分の子どもなら汚いと思わない。	4.70	1.17	4.78	1.19	—	n.s
17 子どもに関わっていると、時間の経つのを忘れる。	5.07	0.78	5.30	0.78	—	n.s
18 子どもを育てることに充実感を感じる。	4.67	0.88	5.30	0.72	-3.703	p<.001
20 育児に専念したいと思う。	4.07	1.27	4.41	1.25	-1.732	p<.10
因子Ⅱ；育児からくる疎外感	2.84	0.54	2.67	0.43	—	n.s
2 早く育児から解放されて、自由な生活がしたい。	2.74	1.10	2.74	0.94	—	n.s
3 子どもを育てることが負担に感じられる。	2.26	1.20	2.26	1.29	—	n.s
4 育児をしていると、自分が世の中に遅れてしまうという感じがする。	1.78	0.70	1.93	0.78	—	n.s
6 育児は孤独な仕事だと思う。	2.22	1.01	2.15	1.13	—	n.s
8 自分は育児をすることには自信がない。	3.48	1.16	3.07	1.14	2.275	p<.05
9 育児をしていると、自分の行動が制限される。	4.07	0.78	3.44	0.93	3.253	p<.01
12 育児をしていると、自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるように感じる。	3.30	1.32	2.89	0.93	1.786	p<.10
13 育児をしていると、自分の若さや女性としての美しさが失われてしまうように感じる。	2.48	1.25	2.48	0.89	—	n.s
15 育児をしている母親は疲れてみずぼらしく見える。	2.07	0.92	2.00	0.83	—	n.s
19 育児ノイローゼになる母親の気持ちが解る。	4.00	0.78	3.70	1.17	—	n.s

う。

(3) 保育実習の事後学習の効果

保育実習直後と2ヶ月後の事後を比較してみると、両因子には有意な差がみられなかったが、育児への接近感情項目「子どもを育てることは自分には向かない(逆転)」( $p < .01$ )の得点が有意に上がり、育児からくる疎外感項目「育児をしていると自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるように感じる」( $p < .10$ )の得点が下がっている傾向がみられた。(表3)つまり、育児への自信が増大し、育児への拘束感・束縛感が減少している。この事実から、保育実習を振り返り、実習報告集にまとめるなどの事後学習は、保育実習で高められた育児性を定着させるということがうかがわれる。

(4) 4年生の育児性との比較

3年生の事後学習後と1年後の4年生を比べてみると、4年生において、育児への接近感情因子では得点が低い傾向にあり( $p < .10$ )育児からくる疎外因子では、得点が有意に高くなっている( $p < .001$ )(表4)。すなわち、保育実習事後学習後の3年生と1年後の4年生では育児性に差があることが認められた。項目ごとにみても、育児への接近感情の2項目、「子どもを育てることに生きがいを感じる」( $p < .10$ )「子どもに関わっていると、時間の経つのを忘れる」( $p < .10$ )において、4年生の方が実習事後の3年生より低い傾向にある。一方、育児への疎外感の10項目のうち7項目「子どもを育てることが負担に感じられる」( $p < .01$ )「育児は孤独な仕事だと思う」( $p < .05$ )「自分は育児をすることには自信がない」( $p < .01$ )「育児をしていると、自分の行動が制限される」( $p < .01$ )「育

表3 保育実習直後と事後学習後における項目及び因子の平均得点の変化

因子 尺度項目	保育実習直後(n=27)		事後学習後(n=27)		t値
	M	SD	M	SD	
因子Ⅰ: 育児への接近感情	4.87	0.59	4.918	0.70	— n.s
1 子どもを育てることが好きである。	5.48	0.80	5.41	0.80	— n.s
5 子どもを育てることに生きがいを感じる。	4.81	0.96	4.96	0.85	— n.s
7 自分の子どもを早く(もう一度)産んで(得て)みたい。	5.11	1.05	4.89	1.28	— n.s
10 子どものために、自分がしてやることを考えると気持ちがはずんでくる。	4.70	0.95	4.93	0.96	— n.s
11 子どもを育てることは、自分には向かない(逆転)。	4.48	1.01	4.96	0.81	-2.801 p<.01
14 子どもの教育や将来のためなら、どんなことでもするつもりである。	4.33	1.27	4.41	1.19	— n.s
16 子どもの便やヨダレなど、自分の子どもなら汚いと思わない。	4.78	1.19	4.70	1.41	— n.s
17 子どもに関わっていると、時間の経つのを忘れる。	5.30	0.78	5.22	0.93	— n.s
18 子どもを育てることに充実感を感じる。	5.30	0.72	5.26	0.76	— n.s
20 育児に専念したいと思う。	4.41	1.25	4.44	1.28	— n.s
因子Ⅱ: 育児からくる疎外感	2.67	0.43	2.50	0.62	— n.s
2 早く育児から解放されて、自由な生活がしたい。	2.74	0.94	2.56	0.93	— n.s
3 子どもを育てることが負担に感じられる。	2.26	1.29	2.11	0.85	— n.s
4 育児をしていると、自分が世の中に遅れてしまうという感じがする。	1.93	0.78	1.85	0.77	— n.s
6 育児は孤独な仕事だと思う。	2.15	1.13	2.22	0.97	— n.s
8 自分は育児をすることには自信がない。	3.07	1.14	2.70	1.03	— n.s
9 育児をしていると、自分の行動が制限される。	3.44	0.93	3.37	1.18	— n.s
12 育児をしていると、自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるように感じる。	2.89	0.93	2.41	1.01	1.757 p<.10
13 育児をしていると、自分の若さや女性としての美しさが失われてしまうように感じる。	2.48	0.89	2.26	0.90	— n.s
15 育児をしている母親は疲れてみずぼらしく見える。	2.00	0.83	1.81	1.04	— n.s
19 育児ノイローゼになる母親の気持ちが解る。	3.70	1.17	3.70	1.10	— n.s

表4 事後学習後(3年生)と1年後(4年生)における項目及び因子の平均得点の差

因子 尺度項目	3年生(n=27)		4年生(n=27)		t値
	M	SD	M	SD	
因子Ⅰ：育児への接近感情	4.92	0.70	4.589	0.70	1.724 p<.10
1 子どもを育てることが好きである。	5.41	0.80	5.19	0.88	— n.s
5 子どもを育てることに生きがいを感じる。	4.96	0.85	4.48	1.16	1.741 p<.10
7 自分の子どもを早く(もう一度)産んで(得て)みたい。	4.89	1.28	4.56	1.65	— n.s
10 子どものために、自分がしてやることを考えると気持ちがはずんでくる。	4.93	0.96	4.59	1.08	— n.s
11 子どもを育てることは、自分には向かない(逆転)。	4.96	0.81	4.52	1.19	— n.s
14 子どもの教育や将来のためなら、どんなことでもするつもりである。	4.41	1.19	4.00	1.07	— n.s
16 子どもの便やヨダレなど、自分の子どもなら汚いと思わない。	4.70	1.41	4.81	1.39	— n.s
17 子どもに関わっていると、時間の経つのを忘れる。	5.22	0.93	4.74	1.13	1.707 p<.10
18 子どもを育てることに充実感を感じる。	5.26	0.76	4.93	0.96	— n.s
20 育児に専念したいと思う。	4.44	1.28	4.07	1.21	— n.s
因子Ⅱ：育児からくる疎外感	2.50	0.65	3.13	0.65	-3.560 p<.001
2 早く育児から解放されて、自由な生活がしたい。	2.56	0.93	2.96	0.90	— n.s
3 子どもを育てることが負担に感じられる。	2.11	0.85	2.96	1.13	-3.141 p<.01
4 育児をしていると、自分が世の中に遅れてしまうという感じがする。	1.85	0.77	2.11	0.89	— n.s
6 育児は孤独な仕事だと思う。	2.22	0.97	2.96	1.48	-2.172 p<.05
8 自分は育児をすることには自信がない。	2.70	1.03	3.67	1.27	-3.058 p<.01
9 育児をしていると、自分の行動が制限される。	3.37	1.18	4.26	1.10	-2.867 p<.01
12 育児をしていると、自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるように感じる。	2.41	1.01	3.11	1.31	-2.210 p<.05
13 育児をしていると、自分の若さや女性としての美しさが失われてしまうように感じる。	2.26	0.90	2.74	1.16	-1.699 p<.10
15 育児をしている母親は疲れてみずぼらしく見える。	1.81	1.04	2.00	1.00	— n.s
19 育児ノイローゼになる母親の気持ちが解る。	3.70	1.10	4.52	0.98	-2.875 p<.01

児をしていると、自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるように感じる」(  $p < .05$  ) 「育児をしていると、自分の若さや女性としての美しさが失われてしまうように感じる」(  $p < .10$  ) 「育児ノイローゼになる母親の気持ちが解る」(  $p < .01$  ) において、4年生の方が得点が高くなっている。このことから、4年生に進むと、育児への否定的感情(育児への負担感・孤独感・不安感・拘束感など)が増大していく可能性があることが示唆された。

#### 4 考察

##### < 保育実習と事後学習の効果 >

中野<sup>34)</sup>は、中学生(男女)と保育専攻短大生を対象として調査を行い、乳幼児との接触体験は、乳幼児への好意的なイメージを促進し、非好意的なイメージを弱めることを明らかにした。他にも、乳幼児との接触経験が子どもへのポジティブな感情を増大させると述べている研究はいくつかなされている

(中山<sup>35)</sup>など)。

本研究でも、乳幼児との接触経験(保育実習)が育児への接近感情(肯定的感情)を増大させ、育児からくる疎外感(否定的感情)を低減させる、すなわち育児性を促進させることが確かめられた。さらに、その育児性は事後学習を経た2ヶ月後において、やや高まりを見せ、定着されていた。保育実習の事後学習、すなわち、乳幼児との直接接触経験である保育実習を振り返り、言語化することを通して、自分自身の感情や体験を客観化・内面化していく作業は、高まった育児性を定着させる効果があることがわかった。

##### < 4年生の育児性 >

育児性に変容するという立場のもと、事後学習からさらに1年を経過した4年生は、横断的調査での参考データであるが、育児への否定的感情が増大することがうかがわれた。

鈴木<sup>36)</sup>は、「女子青年の育児性の「子どもへの接近感情」と「育児不安」は、ともに発達により（年齢とともに）高まるが、「育児不安」因子の最も高い25～29歳で「子どもの接近感情」因子が低くなる。25～29歳の年齢では、出産や育児を経験している同年代の友人が身近に存在するようになり、育児の喜びというようなポジティブな情報ばかりでなく、育児に伴うストレスといったネガティブな情報も得ていることが考えられる。育児不安や虐待といった社会問題を身近な問題ととらえられるようになり、それが育児への否定的なイメージにつながり、育児不安を上昇させていることが考えられる。」と述べている。

本研究では、保育専攻大学生の21～22歳において、この現象がすでにみられることが認められた。このことは、保育専攻大学生としての学びを通して、乳幼児や子どもへのかかわり、育児に関わる現実の厳しさ（例えば虐待など）を認識できたためだろうと考えられる。

## 5 おわりに

本研究では、保育専攻大学生の育児性が保育実習

及びその後の学習（事後学習）によってどのように変容するのか、を明らかにすることを目的として、保育専攻大学生3年生に対して保育実習の直前、直後及び2ヶ月後の事後学習後に、並びに4年生に対して育児性尺度を用いて育児性（育児への態度）を調査した。その結果、保育実習を経験することで、育児への接近感情（肯定的感情）は増大し、否定的感情は低減すること（育児性が促進する）ことが明らかになった。これは、保育実習直後の高揚感も大いに影響していると思われるが、この感情は2ヶ月後もほぼ変わらず維持される。しかし、その後の学内での学習、児童福祉施設での現場実習（3年生2～3月）を経験し、子どもと子どもに関わる状況への理解がより深まったこと、また就職活動、卒業への準備などを通して自分が親になり子育てをするということに現実味が増したことで、育児への肯定的感情が低減し、否定的感情は増大する、つまり、育児性は変容する可能性がある、という示唆が得られた。

今回は、予備調査として横断的に4年生も調査対象としたが、3年生に対して縦断的な調査を行い、育児性の変容を確かめていきたい。さらに、対象数を増やすことも今後の課題である。

## 引用・参考文献

- 1) 牧野カツコ（1982）乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞、家庭教育研究所紀要、3：34 - 56
- 2) 松村京子（2001）思春期における支援対策 母性・父性の涵養：教育学の立場から、清水凡生（編）総合思春期学、診断と治療社、東京
- 3) 大日向雅美（1988）母性の研究、川島書店
- 4) 柏木恵子（1993）父親の発達心理学 父性の現在とその周辺、初版、川島書店、東京
- 5) 原ひろ子・館かおる（1991）母性から次世代育成力へ、初版、新曜社、東京
- 6) 中山哲哉（2004）子どもとの接触経験が女子学生の育児性に及ぼす影響～児童福祉施設における社会福祉実習の場合～、吉備国際大学社会福祉学部研究紀要、9：117 - 123
- 7) 大日向雅美（2000）母性・父性から「育児性」へ、助産婦雑誌、54（9）：9 - 13
- 8) 前掲5)
- 9) 汐見稔幸（2000）現代父性論、助産婦雑誌、54、9：47 - 51
- 10) 前掲6)
- 11) 中山哲哉（2001）母親の育児性に影響を及ぼす要因 母親を取り巻く人間関係及び母親自身の達成指向・社会と

のつながり、福祉おかやま、19：2-10、42

- 12) 中山哲哉 (2002) 女子学生における育児性の形成促進、福祉おかやま、20：2-7
- 13) 中山哲哉 (2005) 女子高校生における育児性の形成発達、福祉おかやま、23：13-20
- 14) 前掲7)
- 15) 前掲6)
- 16) 松岡治子・和田佳子・花沢成一 (2000a) 青年期男女における親性準備性の性差及び母性度・父性度の発達 親性準備性の研究( )、母性衛生、41(4)：492-499
- 17) 松岡治子・和田佳子・花沢成一 (2000b) 青年期男女における母性度・父性度の発達に関する要因の検討 親性準備性の研究( )、母性衛生、41(4)：500-505
- 18) 牧野カツコ・中西雪夫 (1989) 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(第1報) 「準備状態」の測定尺度の作成、日本家庭科教育学会誌、32(2)：55-53
- 19) 中西雪夫・牧野カツコ (1989) 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(第3報) 「準備状態」の構成要素の分析と保育教育への示唆、日本家庭科教育学会誌、32(2)：61-65
- 20) 青木まり・松井豊 (1988) 青年期後期における女性性の発達 異性性と母性準備性の構造について、北海道教育大学紀要、39(1)：85-94
- 21) 鈴木幹子・清水洋子・伊藤裕子 (2005) 女子青年における育児性の発達、聖徳大学児童学研究紀要、7：89-94
- 22) 前掲19)
- 23) 前掲15)
- 24) 前掲12)
- 25) 前掲20)
- 26) 前掲12)
- 27) 前掲20)
- 28) 杉山智春 (2006) 母性意識および次世代育成力と小さい子どもの世話の体験の関連、母性看護、37：104-106
- 29) 花沢成一・武田和美・戸田早苗・高野広子 (1986) 児童・青年期における乳児接触経験と母性感情の発達、母性衛生、27：615
- 30) 前掲6)
- 31) 前掲12)
- 32) 前掲6)
- 33) 前掲6)
- 34) 中野由美子・伊藤野里子・谷田貝公昭・村越晃 (2004) 次世代育成力の形成に関する調査研究(1) 接触体験・保育実習体験が学生の幼児イメージに与える影響、目白大学人間社会学部紀要、4：67-79
- 35) 前掲6)
- 36) 前掲21)